

## 尺度使用マニュアル

### <尺度名>

「友人関係への動機づけ尺度」

### <測定概念>

近年、友人関係の形成や維持を動機づけの観点から捉えようとする研究が増えてきている。本尺度は、“自己決定理論 (self-determination theory; Ryan & Deci, 2000) の枠組みから、友人関係への動機づけを測定するものである。下位尺度は、「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の4つである。教示は、「なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか」である。なお、ここでの友人は、特定の友人ではなく全般的な友人関係を想定している。

### <適用範囲>

最初は、大学生を対象として作成された。その後、項目表現に若干の修正を加えたうえで中学生および高校生に適用した例もあり (岡田, 2006a, 2006b), 中学生以上に適用可能である。

### <尺度構成手続き>

自己決定理論における概念的定義 (Ryan & Deci, 2000) や概念的に同一の因子構造をもつ他領域の動機づけを測定する尺度 (Hayamizu, 1997) をもとに項目を作成した。最初に合計 28 項目を予備的な項目群として作成し、大学生 488 名に対して実施した。データに対して、下位尺度ごとに主成分分析を行い、主成分負荷量の高い上位 4 項目ずつを選定し、それらを尺度項目とした。選定された計 16 項目に対して、以下の方法によって信頼性と妥当性の検討を行った。

### <信頼性>

内的整合性について、 $\alpha$  係数は 0.61 から 0.86 であった。再検査信頼性について、約 3 週間を空けての同一下位尺度間の関係数は 0.68 から 0.83 であった。

### <妥当性>

妥当性については、①下位尺度間の相関パターン、②確認的因子分析、③他の尺度との相関の3点から検討した。①については、先行研究に一致する相関パターンが示された。②については、概念に一致した 4 因子構造を確認した。③については、自己決定意識、友人関係に対するコンピテンス、対人不安、公的自己意識との間に予想通りの関連が見られた。

### <採点方法>

各 4 項目からなり、下位尺度ごとに 4 項目の加算平均をもって下位尺度得点とする。選択肢は、“あてはまらない (1 点)” から “あてはまる (5 点)” の 5 件法である。また、先行研究に

従い、動機づけの自己決定性の程度を表わす **Relative Autonomy Index (RAI)** という指標を用いることもできる。この指標の算出方法は、 $(-2 \times \text{外的}) + (-1 \times \text{取り入れ}) + (1 \times \text{同一化}) + (2 \times \text{内発})$  である。下位尺度と RAI の両方を用いて分析を行うことが望ましいと考えられる。

#### <尺度の使用について>

下位尺度については、概念的な整合性や RAI の使用を考えれば、4 下位尺度を同時に実施することが望ましい。

#### <解釈方法>

得点が高いほど、その動機づけが高いことを示す。

#### <出典文献>

岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから— *パーソナリティ研究*, 14, 101-112.

#### <連絡先>

岡田 涼 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)  
ryooo@r4.dion.ne.jp

#### <無料・有料の別>

無料

#### <著作権関連情報>

研究等における使用にあたっては、引用文献に出展を明記したうえで自由に使用して頂いてかまわない。

#### <その他>

本尺度が、他の年齢段階の対象者に使用された研究は以下の通りである。

岡田 涼 (2006a). 自律的な友人関係への動機づけが学業的援助要請に及ぼす影響 *日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集*, 612.

岡田 涼 (2006b). 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響 *パーソナリティ研究*, 15, 52-54.

また、概念の詳細については以下の文献を参照されたい。

Ryan R.M., & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.